

第16回 支店長のわがまち紹介

茨城県石岡市

古都千三百年の歴史と郷の文化に出会えるまち

看板建築 写真提供：石岡市



茨城県内の44の市町村を、それぞれにゆかりのある筑波銀行の支店長がご紹介します。第16回は、石岡市です。

筑波銀行は、“地域復興支援プロジェクト『あゆみ』”のもと、平成26年6月に石岡市、石岡市観光協会、JTB関東と「石岡市の地域振興に関する協定」を締結し、地域振興・活性化を目的とした取組みを進めています。石岡支店長の高田徹が、石岡市長 今泉文彦氏、市長公室次長兼政策企画課長 加藤乃利明氏、経済部商工観光課長 越渡康弘氏、文化振興課長 武石誠氏、秘書広聴課長 豊崎康弘氏にお話をうかがいました。

●石岡市が一番と考えていること、自慢できることはなんですか。

平成17年10月1日に旧石岡市と旧八郷町が合併し、石岡地区の長い歴史と、八郷地区の里山の自然が調和するまちとなりました。

石岡地区には、縄文時代のはるか以前から人が暮らし、奈良時代、江戸時代、明治時代から現代まで連続と続く歴史があります。古墳時代には、奈良の都に匹敵する豪族がいたとされ、5世紀後半の築造と推定される舟塚山古墳は、茨城県内で最大、東日本第2位の規模を誇ります。常陸国が7世紀に成立してからはその国府となり、国衙、国分寺、国分尼寺が置かれました。

国府の建物の瓦は八郷地区で焼かれ、その跡は瓦塚として現存し、県内最大級の規模である20基以上の窯跡が発見されました。現在、瓦塚の国指定史跡を目指して調査報告書を取りまとめているところです。

江戸時代になると、石岡市は水戸藩の枝藩である府中松平家の支配となります。藩主は定府^{※1}であったため、石岡には陣屋が置かれました。現在、市民会館駐車場への移築改修を行っている陣屋門はこの陣屋の表門で、県指定の文化財です。石岡市の文化財の多くは未だ地中に埋まっており、目で確認することは難しい状況です。陣屋門は目に見え、また、中心市街地にあることから、石岡市の歴史のシンボルとして市民に末永く親しまれる存在であるよう願っています。

最近、中心市街地に建ち並ぶ昭和初期につくら

れた看板建築が脚光を浴びています。看板建築は、大正12(1923)年の関東大震災の復興で流行した建築方法で、木造2階建ての店舗兼住宅の建物前面を軒を出さずに平坦にし、モルタルや銅板で仕上げ、装飾を付けることが特徴の工法です。看板のような平坦な壁に自由な装飾が施されたため「看板建築」と命名されました。(表題の写真参照)

昭和4(1929)年の石岡大火の復興時に多く建築され、その後約80年間使用された建物が現存し、7棟の看板建築が登録文化財^{※2}になっています。マスコミでも紹介され、看板建築を巡る観光客の姿もよく見られるようになりました。

一方、八郷地区の里山の景観を象徴するのは、約80軒の大切に引き継がれ、守られてきた茅葺き屋根の農家屋敷です。里山は、山があり、田園があり、農村の営みがある景観で、農業がしっかりしていなければ維持できないものです。

茅葺きの家屋を存続させるためには、屋根を葺く職人の育成や茅の確保等の取組みが必要です。「常陸風土記の丘」に縄文時代から江戸時代の茅葺き屋根の家屋を展示し、茅葺き職人の育成にも力を入れています。茅はつくば市の高エネルギー加速器研究機構の敷地内に群生しているものを使っています。

土浦市・つくば市方面から八郷地区へのアクセスは、平成24年の朝日トンネル開通により格段に向上しました。観光いちご園、茨城県フラワーパークの入場者は開通前より2割増加し、やさど温泉ゆりの郷の入場者数は、平成12年の開館以

※1 江戸時代に参勤交代を行わずに江戸に定住して、将軍や藩主に仕える者。(出典：フリー百科事典Wikipedia)

※2 石岡市には全部で19棟の登録文化財がある。

来最高の19万7千人となりました。

毎年9月の3連休に行われる「石岡のおまつり」は、関東三大祭り

に数えられ、石岡市が誇る観光資源のひとつです。今年は3日間とも天候に恵まれ、マスコミにも紹介され、昨年より10万人多い47万8千人もの人出がありました。

伝統的な祭りなので、今年も格調高い美しい祭りになるよう心がけました。例えば、ゴミを拾う人員の配置を強化し、ディズニーリゾートのイメージで、道にゴミが捨てられてもすぐに拾う体制としました。参加者にも、出番が来たらお酒を飲まない、足袋はだしではなくきちんと雪駄を履く等のマナーや身だしなみを徹底しました。



石岡のおまつり 写真提供:石岡市

昭和50年代から年々参加町内が増加し、茨城県内で最大規模の祭りとなりましたが、さらに環境や態勢を整え、60万人の人出を見込めるような祭りに育てていきたいと考えています。

市内には4軒の酒蔵があります。かつて石岡地区には約15軒もの酒蔵があり、「関東の灘」と称されるほど酒造りが盛んでした。地元の人には「石岡」を「いしょうか」と発音し、「一升買う」に通ずるといふ笑い話もあるくらいです。醸し出される酒の質は非常に高く、今年5月の平成25年酒造年度全国新酒鑑評会では、出品した3軒の酒蔵全てが金賞を受賞するという快挙を成し遂げました。この快挙を起爆剤に、乾杯条例(今年3月制定)も絡め、酒に関連するいろいろなイベントを開催し、石岡市の酒を広める取組みを行います。石岡市が良い酒を醸せるのは、筑波連山で長い年月をかけてろ過された良い水があるため、良い里山があることの裏付けとなるのです。

●筑波銀行に期待することをお聞かせください。

協定を結んで以来、筑波銀行とは、天空トレイルラン、看板建築へのプロジェクションマッピング、石岡のおまつりと立て続けに一緒に活動しました。行員のさりげない行動の中に地域、取引先、銀行のことを考え、気遣っていることがわかり、近江商人の「三方良し」を思い起こさせ、感心しました。筑波銀行のこの行動姿勢とネットワークに期待しています。



今泉市長



加藤次長



越渡課長



武石課長



豊崎課長



高田支店長

石岡市は農業が盛んで、良質の農作物を生産しています。しかし、加工業者が少ないため、加工業者の多い他の市町村に出荷、商品化され、販売されています。これは大変残念なことです。石岡市産の農作物が市内で加工され、商品になるよう、生産者と加工業者の連携の仲立ちや、資金面での支援を期待しています。

また、定住人口の増加について、県内の市町村同士が連携して子育て政策等を実施し、人口増加策を打ち出したいと考えています。同じ悩みと目的を持つ市町村同士が住民を奪い合ってお互い疲弊するのではなく、共に連携して取組みたいと考えています。その際、筑波銀行がその仲立ちとなることを期待しています。

●今後の展望を教えてください。

平成27年は、石岡市合併10周年、フラワーパーク開園30周年、石岡商工会議所60周年等、様々な節目の年となります。合併記念イベント等を実施し、市全体で盛り上げていきます。

今後は、石岡市が持つ里山と歴史・文化の特性を活かしたオンリーワンの施策を展開し、ハード面、ソフト面の両方からまちづくりを進めていきます。

具体的には、今までにない観光政策を打ち出し、市外から多くの観光客に来ていただき、楽しんでもいただきたい。歴史のまちにふさわしいまちなみをつくるため、陣屋門をはじめとする歴史的建造物を復元し、少しずつ整えていきます。観光政策の一環として、「石岡のおまつり」にさらに力を注ぎます。祭りのあり方も、関係者の地道な活動が奏功し、参加者の意識が高まり、マナーも良くなり、全体的に良い方向に向かっていると自負しています。祭りでは、それぞれの町内が世界で一番良い所である、という掛け声があります。祭りを通じて、ふるさとを大切に思う心が芽生えるのです。このような点も、祭りを守り、伝える意義の一つであると感じています。

また、石岡市では、小学校1年生から中学校3年生まで、郷土・石岡について学びます。現在、その副読本作成のため、市内の有志が「府中塾・山根塾」を発足し、歴史や伝統文化を調査研究している最中です。

(文責:筑波総研株式会社 主任研究員 國安 陽子)